

六 災 害

1 福川西部の大火

昭和二十二年四月一日、午後一時ごろ福川駅を発車した下り貨物列車の機関車（S七）の煤煙が、山陽線路わきの福川上新開の民家の屋根に飛来し、おりからの南風（風速二〇ノノ）に煽られて火災が発生し、数分で最初の民家は全焼し、猛火となって隣接家屋に延焼、風も強まったために数百戸遠隔地の西町、上迫の山林へと火の粉が飛散し、火災現場が各所に発生して消火活動は困難をきわめた。

なお、当時は戦後日浅く、消防施設の不備と水利施設も不十分で、民家の井戸水の利用と天王堤の流水によって消火活動をする程度であり一時は福川全町が猛火につつまれる未曾有の大火であったが、富田警防団の応援消火活動と住民の支援活動もあって夜に入りようやく鎮火した。

全焼家屋 八九戸 罹災二〇世帯、焼失面積 六三七九坪

2 黒髪島の火災

昭和二十二年十一月、黒髪島と仙島の間の干渡ひとという所に終戦後、外地の引揚者が数軒の家を建てた。そのう



キジャ台風を受けた東新田

ちの一軒の火の不始末から出火し全焼した。それが延焼して付近のシダや枯木等を焼き全山が火の海となる。三日間焼け続け、徳山、福川、富海方面より、消防団が消火活動に当たったが手の施しようがなく、船中で見物よりほかなかった。

福川・富田方面から見ると黒煙、白煙が舞い、ときおり大火柱が立ちのぼるのが見えた。とくに夜間はものすごく真赤な火柱が空高く舞い上がり火山の噴火を思わせるほどだったという。

3 風水害

ほとんど毎年の梅雨時期の豪雨や台風通過後の被害は、たいへんなものである。戦後のおもな風水害をあげてみよう。

富田・福川地区 昭和二十五年九月十三日・十四日、当地を襲ったキジャ台風の高潮で海岸や河川の土手が決壊し、小川屋開作、柏屋開作、西柳開作等の開作や、広大な塩田が一面の海と化した。また多数の家屋も浸水崩壊し惨澹たる状況であった。潮止工事は、昼間の引潮時の短い時間に工事を完成しなければならぬなど困難をきわめ、地区の人々も総出で土俵（カマス）置きなど復旧作業に協力した。和田地区も、農作物を中心に被害は大きく被害概算も次のとおりであった。